

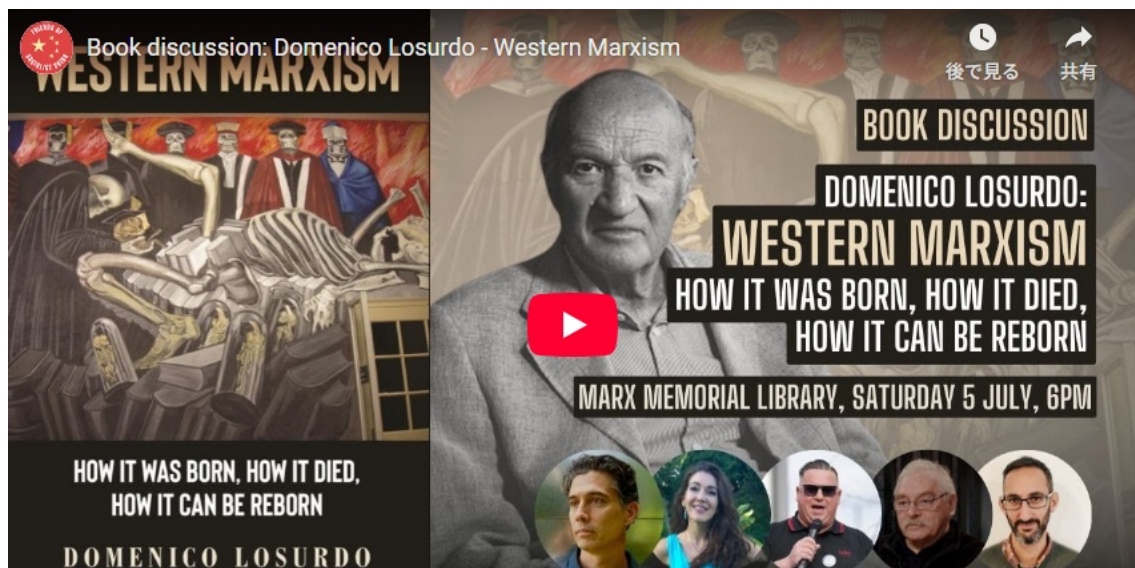
西側マルクス主義を拒否し、社会主義諸国を擁護し、反帝国主義の世界人民とともに立ち上られ

カルロス・マルティネス

マンスリー・レビュー 2025 年 7 月 29 日

<https://mronline.org/2025/07/29/reject-western-marxism-defend-the-socialist-countries-and-stand-with-the-peoples-of-the-world-against-imperialism/>

2025 年 7 月 5 日（土）、「社会主義中国の友」は、「モーニングスター」（英共産党機関紙）、国際マニフェスト・グループ、批判理論ワークショップ、イスクラ・ブックスとともに、ドメニコ・ロズルドの重要な著書『西側マルクス主義はいかに生まれ、いかに死に、いかに再生しうるか』についての討論会を開いた。この伝説的なイタリア人哲学者は、マルクス主義が「西洋」と「東洋」に二分された長く複雑な歴史を描いている。



会議はロンドンのマルクス記念図書館で直接（および Zoom と YouTube を介したオンラインで）開催され、満員の会場では、ガブリエル・ロックヒル（英語版編集者）、ジェニファー・ポンセ・デ・レオン（英語版序文の共著者）、アレックス・ゴードン（マルクス記念図書館議長）、カルロス・マルチネス（「社会主義中国の友」共同編集者）が発言し、フランシスコ・ドミンゲス（ベネズエラ連帯キャンペーン全国書記）が司会を務めた。

以下にイベントのビデオとカルロス・マルチネスのスピーチを掲載する。カルロスは、マルクス主義がその創始以来、世界中を旅してきたことを説明する。「東と南への旅」であり、「西ヨーロッパと北米の産業プロレタリアートのための解放的枠組みから、世界中の労働者と被抑圧人民のための解放的枠組み」へと変貌させた。

さらに彼は、この階級闘争のグローバル化を拒否することに基づいて、アカデミックな西側マルクス主義を定義し、この傾向が社会主義国家を支援することを拒否し、植民地主義や帝国主義との闘いを優先させる物質的・イデオロギー的理由を探求する。

演説は行動計画で締めくくられている：

教条主義と純粹主義を否定し、ヨーロッパ中心主義と排外主義を否定し、社会主義諸国、被抑圧諸国、帝国主義諸国の労働者階級と進歩的勢力からなる世界統一戦線におけるわれわれの役割を果たすことに立ち戻ろう。それこそが、私たちを社会主義の未来へと導く道なのだ。

カルロス・マルチネスの発言

私は 10 代の頃から西側であれやこれやとマルクス主義運動に関わってきたが、ありがたいことに、**西側マルクス主義**と特に親しくなったことはなかった。

私が育った政治的伝統は、社会主義国家を支援することの重要性を強調し、常に帝国主義、植民地主義、人種差別との闘いを優先していた。中国を支持

し、朝鮮民主主義人民共和国を支持し、キューバを支持し、アイルランド人、パレスチナ人、ジンバブエ人、ベトナム人、その他の人々の民族解放闘争を支持することは、まさにその伝統の一部だった。

だから、私は西側のマルクス主義者であるにもかかわらず、ロズルドの言うような**西側マルクス主義**学者にはそれほど接してこなかったし、他の多くの人たちが経験するような極めて困難な「アンラーニング」（これまで身に着けた知識や価値観を手放し、思考をリセットすること）のプロセスを経る必要もなかった。レーニンはたくさん読んだが、アドルノ、ジゼク、ペリー・アンダーソンはほとんど読んでいない。

それにもかかわらず、ロズルドの本は私にとって実に明快で、みなさんがいつも直面している客観的に反動的な立場のイデオロギー的な根源を理解するのに役立った。というのも、西側マルクス主義は主にアカデミックな象牙の塔の中に存在しているのだが、革命的变化を求めるより広い運動に浸透しており、そこにはかなり肥沃な土壌があるようなのだ。

マルクス主義は東へ、そして南へ

マルクス主義が生まれながらにして西洋的であることは明らかだ。『共産党宣言』の冒頭にはこうある：

ヨーロッパには共産主義の亡霊が取り憑いている。

黎明期の共産主義運動は、地理的にはヨーロッパと北米に限定され、ほぼ独占的に産業労働者階級に焦点を当てていた。

しかし、共産主義運動は当初から、東洋と南方への旅を続けていた。それはマルクス自身の存命中も含めてだ。

第一に、帝国主義という現象は、レーニンによって体系的に研究されたが、マルクスとエンゲルスは 1860 年代から 1870 年代にかけて注目し始めたものであり、資本の活動領域が地理的に拡大した。資本主義は世界的なシステムになりつつあり、それに伴って、メキシコ・シティからサンクトペテルブルク、

上海に至るまで、プロレタリアート-財産を持たない労働者の階級-が誕生した。

第二に、マルクスとエンゲルスは、彼ら自身の思考が発展するにつれて、資本主義国における労働者階級の闘争と、植民地抑圧者に対する被抑圧諸国労働者階級の闘争との間に、切っても切れないつながりがあることを理解するようになった。

マルクスとエンゲルスにとって、この知的な旅はアイルランド問題から始まる。もちろん、アイルランドは南でも東でもない。しかし、イングランドの最初の植民地であり、残忍な植民地抑圧の下で何百年も苦しんできた。

マルクスは当初、イギリスにおける社会主義革命がアイルランドに民族解放をもたらすと考えていた。しかし、『共産党宣言』の出版から 21 年後の 1869 年に、マルクスは「イギリスの労働者階級は、アイルランドをなくすまでは、何事も成し遂げることはできないだろう」と書いている。

彼は「他国を抑圧する国家は、自ら自由になれない」と続け、「イングランドとアイルランドの対立を前面に押し出し、どこでも公然とアイルランド人の味方をする」よう支持者に呼びかけた。彼は、「アイルランドの民族解放は、抽象的な正義や人道的感情の問題ではなく、イングランドの労働者階級自身の社会的解放の第一条件である」と指摘した。

つまり、150 年以上も前に、科学的社会主義の創始者たちはすでに、植民地的・民族的抑圧との闘いが不可欠であることを指摘していたのである。

重要なことは、その理解が、資本主義の中心地における民族抑圧との闘いにも及んでいたことである。『資本論』第 1 巻の印象的な一文がそれである。

「白い皮膚の労働者は、黒い皮膚の労働者が烙印を押されている限り、決して自由になることはできない」。

帝国主義の発展は、19 世紀末に加速した。

レーニンは、資本の集中によって、独占企業が利潤追求のためにますます海外へと駆り立てられるような段階に達したと指摘した。その結果、世界のより多くの地域が資本主義体制に組み込まれたが、平等な条件ではなかった。む

しろ、これは「植民地的抑圧の世界体制であり、一握りの『先進』国によって、世界の人民の圧倒的多数が金融的に締め付けられる」ものであった。

レーニンは言う。

帝国主義は、併合をもたらし、民族抑圧を強め、その結果、抵抗も強めている。

この戦略的意味は、先進資本主義国の労働者階級は、帝国主義支配階級という共通の敵に対して、世界中の被抑圧者の広範な大衆と団結しなければならないということである。

それゆえ、1920年の共産主義インターナショナル第2回大会では、「世界の労働者は団結せよ」というスローガンが、「すべての国の労働者と被抑圧人民は団結せよ」に更新された。

そしてまた、これは「抽象的な正義や人道的感情の問題ではない」というマルクスの指摘に戻ると、帝国主義が強力である間は、支配階級は強力であり、社会主義的前進の可能性は極めて限られている。被抑圧国の民族独立と主権は、支配階級の弱体化を意味し、労働者階級の相対的地位は強くなる、ということだ。

だからこそレーニンは1921年に言った。「闘争の結果は、ロシア、インド、中国などが地球人口の圧倒的多数を占めているという事実によって決定されるであろう。この大多数が、驚くべき速さで解放の闘争に巻き込まれてきたのである。この意味で、社会主義の完全な勝利は完全かつ絶対的に確実である」。

つまり、100年前までに、マルクス主義は明確な世界的適用可能性を発展させ、西ヨーロッパと北米の産業プロレタリアートのための解放的枠組みから、世界中の労働者と被抑圧人民のための解放的枠組みへと変貌を遂げたと言える。

マルクス主義のグローバルな適用可能性は、実際にグローバルに適用された。ロシアや朝鮮、中国、ベトナム、キューバ、ニカラグア、ジンバブエ、モザンビーク、ギニアビサウ、アンゴラなどにおける社会主義革命と民族解放革命の

成功である。これらの実践的経験はすべて、マルクス主義の拡大と深化に貢献した。

西側マルクス主義は抵抗する

ロズルドの言う**西側マルクス主義**は、階級闘争のグローバル化のプロセス全体を本質的に否定している。

第一に、現実存在する社会主義の経験をほぼ全面的に否定している。**西側マルクス主義**の潮流は、ソ連、中国、朝鮮など、現実社会主義が建設される過程から一貫して距離を置いてきた。

これらの学者やグループが社会主義プロセスを支持する場合、その支持は非常に条件付きである。例えば、今世紀初頭のラテンアメリカにおける最初の「ピンク・タイド」は、ブルジョア民主主義の限界の中で構築された社会主義の一形態であったため、それなりに広範な支持があった。

しかし、米国が不安定化と宣伝キャンペーンを強化し、ベネズエラやニカラグアのような国々が革命プロセスを擁護するために国家の抑圧的機械の使用を余儀なくされると、**西側マルクス主義**は幻滅し、支持を撤回した。

西側マルクス主義思想家の中には、一時期、階級闘争を極端に強調した中国の文化大革命に触発された者もいた。しかし、共産党が国内の階級闘争重視をやめ、その発展過程に資本の役割を見つけると、中国が資本主義を復活させたと見なした。

つまり、**西側マルクス主義**には、ロズルドが言うところの「実際に存在する社会主義の独断的否定」が常に見られるのだ。社会主義的プロジェクトが、人々が想像する社会主義的プロジェクトの姿に似ていなければ、それは否定される。

それは、反植民地闘争や反帝国主義闘争の役割を軽視すること、今日の世界における主要な矛盾は帝国主義と被抑圧諸国との間にあるという考え方を否定すること、またマルクス主義の民族解放の考え方を否定することと結びついており、またそれと密接に関係している。キューバ、中国、朝鮮、ベネズエラ、

ラオス、ベトナム、モザンビーク、ニカラグアでは、社会主義のための闘いは、帝国主義との闘い、主権のための闘いと密接に結びついている。

なぜ西側マルクス主義はこうなのか？

西側マルクス主義にはさまざまな傾向や矛盾があるが、その本質は、現実にある社会主義と民族解放という2つの拒絶である。どちらもヨーロッパ中心主義と教条主義の作用である。

しかし、西側左派が国家の問題を最小化することには、明確な物質的根拠があることも肝に銘じておく必要がある。ガブリエルとジェニファーは本書の序文で、アカデミズムの主流がいかに独断的でヨーロッパ中心的で本質的に不活性なマルクス主義を奨励し、アカデミズムで成功するには帝国主義の利益を根本的に脅かさない立場をとることに多かれ少なかれ依存している状況を作り出しているかについて言及している。

レーニンが100年以上前に認識した傾向の縮図であり、「一握りの非常に豊かな国のための高い独占的利益」が「プロレタリアートの上層部を墮落させる経済的可能性」を開き、帝国主義から利益を得る労働者階級の特権層を生み出し、それゆえ帝国主義の成功に物質的な関心を持つということである。

つまり、西側マルクス主義による歪曲は、日和見主義と社会的排他主義のこの傾向が学問の領域にまで拡大したものだと言える。

ここからどこへ向かうのか？

さて、**西側マルクス主義**の潮流が極めて貴重な洞察を生み出し、多くの場合、ジェンダー研究からカルチャー研究まで、さまざまな学問分野にマルクス主義を拡大してきたことを認識することは重要である。マルクス主義は先進資本主義国を基盤としているため、その国の人々が直面する問題に取り組むのが一般的であり、それに基づいて人類の理解を前進させる上で貴重な役割を果たしてきた。

しかし、我々の運動が真の進歩を遂げようとするならば、絶対に主張しなければならないことがいくつかある。

第一に、反帝国主義闘争の優先性であり、支配階級と闘う諸国民との連帯であり、帝国主義に対抗する世界的統一戦線で役割を果たすことである。今日はカボベルデ独立 50 周年なので、アミルカル・カブラル氏の言葉を引用するのが適切であろう。

もし帝国主義が存在し、同時にすべての先進国の労働者階級を支配し、すべての低開発国の民族解放運動を窒息させようとしているのであれば、我々が戦っている敵はただ一つである。

第二は、社会主義国の指導力である。マルクス主義を発展させるプロジェクトの先陣を切っているのが社会主義世界であり、世界社会主義への移行を完成させるという、歴史が我々に課した任務を遂行する方法について、人類の集団的理解を構築するために最も尽力しているのが、社会主義の建設過程に従事している国家、運動、政党であることは明らかであろう。

毛沢東が『実践について』というエッセイで述べた有名な言葉がある。

知識が欲しければ、現実を変える実践に参加しなければならない。
梨の味を知りたければ、自分で食べて梨を変えなければならない。

しかし、中国を理解し、支援し、そこから学ぶことは極めて重要である。中国こそ最大かつ最も先進的な社会主義国であり、台頭しつつある多極化の中核をなす国である。中国が発展するにつれて、私たちはますます、社会主義のもとで何が達成できるかを示す模範として中国を紹介すべきである。

中国は、**西側マルクス主義**のレンズや、純粹主義や教条主義のレンズを通して理解することはできない。100 年以上にわたる熾烈で絶え間ない闘争の過程で、中国の指導者たちは、中国国民の伝統に適し、彼らが直面する絶えず変化する物質的現実に対応する社会主義の道を発展させてきた。

アカデミックな象牙の塔の外では、人々が食卓に食べ物を並べられるか、医療を受けられるか、屋根があるか、子どもたちが良い教育を受けられるかという問題は、中国に億万長者がいるかどうかや、上海にスターバックスや KFC の支

店があるかどうかよりも重要な問題なのだ。鄧小平が主張した「発展こそが唯一の厳然たる真実」であり、「貧困は社会主義ではない」という主張は、裕福な知識人たちから修正主義や降伏主義として否定されるかもしれないが、中国国民の実際のニーズを反映していたのである。

ドメニコ・ロズルドはもちろんこのことすべて理解していた

中国における不平等の問題について、ロズルドは次のように指摘している。中国の台頭は、先進国と発展途上国の不平等という世界規模の不平等との闘いに対する最も並外れた貢献であると。また、「生と死の間に存在する絶対的な不平等」の存在を指摘し、中国の社会主義が並外れた成功を収めたと述べている。つまり「飢餓と飢餓のリスクに内在する絶対的な質的不平等をきっぱりとなくす」ということだ。

これが、マルクス主義的、弁証法的な中国における不平等の分析である。

世界における中国の役割という問題では、アフリカ、ラテンアメリカ、中東、カリブ海地域、太平洋地域における主権と開発に対する中国の支援の方が、中国がもっと援助をして貿易を減らすべきだとか、中国がもっと過激な外交政策をとるべきだとか考えるかよりも重要である。

いうまでもなく、パレスチナでも、イランでも、ベネズエラでも、キューバでも、エリトリアでも、ジンバブエでも、『ワシントンでも北京でもなく』というスローガンはあまり聞かれない。

そしてまた、ロズルドはこのことを非常によく理解しており、中国を「植民地主義と帝国主義によって押しつけられた国際的な分業に、他のどの国よりも挑戦している国であり、コロンブス時代の終焉を進めている国である」と書いている。

この巨大で進歩的な歴史的意義を理解しようとしなないマルクス主義者は、率直に言って、実際にはマルクス主義者ではない。

そこで私たちには行動計画がある。教条主義と純粋主義を拒否し、ヨーロッパ中心主義と排他主義を拒否し、社会主義諸国、被抑圧諸国、帝国主義諸国の

労働者階級と進歩的勢力からなる世界統一戦線において、自らの役割を果たすことに立ち戻ろう。 それこそが、社会主義の未来への道を歩むことになるのだ。

原文はこちら：「社会主義中国の友人たち」による 2025 年 7 月 8 日の社会主義中国の友人たち、モーニングスター、国際マニフェスト・グループ、批判理論ワークショップ、イスクラ書籍主催パネル（詳細は社会主義中国の友人たち）（投稿日 2025 年 7 月 29 日）。

<https://socialistchina.org/2025/07/08/reject-western-marxism-defend-the-socialist-countries-and-stand-with-the-peoples-of-the-world-against-imperialism/>